

雲仙温泉歴史探訪コース：キリシタン弾圧

この十字架は、1600年初期に処刑されたキリシタン殉教者のモニュメントだ。明治時代（1868～1912年）に立てられたこの碑は、1627年から1630年に雲仙で拷問され殺された、およそ33名のキリスト教徒を後世に伝えている。雲仙の地獄温泉の沸き立つ湯の中で受けた彼らの苦難は、明治時代より前の日本のキリスト教の物語終盤のひとつの章だ。

キリスト教が16世紀中頃に最初に日本に来た時、日本中で何十万人もの人が新しい宗教に転向した。しかし、1580年代までに、キリスト教は、日本の一般の人々を自国の宗教から転向するように促し、西洋による侵略や植民地化のために国を弱めた邪悪な宗教として見られるようになった。1587年の宣教師の禁止と、長崎での26人の磔刑のわずか10年後、何万人ものキリスト教徒が暴力による脅しの元に信仰を捨てた。拒否した者は拷問され殺された。

前近代の日本におけるキリスト教の最終章となる出来事は、ここ島原半島で起こった。キリシタン大名の有馬氏は、その氏族の地域の支配者としての地位を奪われ、1616年に松倉氏に取って代わられた。松倉氏は新しい城の建設のために農民に重い税を課した。また、地元のキリスト教徒に対しても様々な刑罰を制定した。蓄積した反感は、ついに飢饉によって火が付き、1637年12月の島原の乱が起こった。

半島のほとんど全ての住民が手に手に武器を取り、浪人や天草諸島から他のキリスト教徒の農民も加わった。しかし、九州全体から12万人を超える幕府軍が反乱を制圧するためにやってきた。1638年4月までに、何万人ものキリスト教徒の男女や子供が殺され、反乱は終わった。